

■ まとめに代えて

生徒たちは「授業の荒れ」と身近なところで暮らしている。調査を通して感じたのはそうした実感だった。教師の場合、自分が生徒指導を心がければ、「荒れ」を克服することができる。しかし生徒は、自分だけががんばっても、「荒れ」に巻き込まれたら、そこから逃げるべきがない。

それと同時に、程度にもよるが、荒れ的な行為がかなり広まっているのを感じた。「授業が始まって教科書を開かない」や「授業中にいねむりをする」などの第1段階的な現象はもちろんのことだが、「小さくした消しゴムを投げる」や「先生の注意を無視する」などの第2段階もそれほど珍しい現象ではなかった。

したがって、「授業の荒れ」のとらえ方にもよるが、荒れ的な現象は予想以上に広まっているのを感じた。第3段階の「荒れ」はさすがに少ないが、きっかけさえあれば、「荒れ」が深刻化する状況がみうけられた。

そして、生徒調査が示すように、荒れ的な行為をする生徒は、偶発的に逸脱するのではなく、自分に自信が持てず、何となく体調がよくなく、ムカついたり、キレやすくなってい

るタイプだった。ストレスがたまり、鬱積している生徒の一群がいる。そうした場に、生徒の気持ちがわからず、細かいことにうるさく、生徒指導の苦手な教師がいると、鬱積が爆発する。他の生徒にしてもムカつく感じを持っているから、一部の生徒の行動に同調する。そうなると、「荒れ」が深刻化する。

こう考えてみると、①逸脱行為へ走る生徒はともあれ、充足感を持てずにイラついている生徒が多いことが、「荒れ」の底流になる。そして、②教科指導はうまいが、生徒指導の苦手な教師がみうけられる。この両者が組み合わせられると、「荒れ」が深刻化する。

「授業の荒れ」というと、教師の指導力が問題になりやすい。確かに、直接的には、教師の指導力を高めることが大事であろうが、その一方で、中学生活に生徒が充足感を持てるように、中学のあり方を立て直すことが重要であろう。特に、生徒たちが中学生活に張りを見いだせるようにするにはどうしたらよいか。学校行事のリニューアルや校則の見直し、部活動の再検討、心理面へのきめ細やかな対応、もちろん、生徒の意欲を引き伸ばす授業方法の開発などが求められよう。